Japanese Journal of Applied Psychology
1980, No. 3・4., 17-40

討　論

普通学級で育つハンディキャップ児

高橋たまき（日本女子大学）
Tamaki TAKAHASHI (Japan Women's University)
林　宏子（茨城市立中津小学校）
Hiroko HAYASHI (Ibaragi, Primary School of Nakatsu)
大脇三恵子（国立身体障害者リハビリテーションセンター）
Mieko OHWAKI (National Rehabilitation Center for the Disabled)
鈴木陽子（早稲田大学）
Yōko SUZUKI (Waseda University)
高橋哲也（府中市立第２小学校）
Tetsuya TAKAHASHI (Fuchu, Primary School of the Second)

本稿は日本応用心理学会主催，昭和54年度公開シンポジウムとして，昭和54年12月１日，慶応義塾大学三田校舎で標記のテーマの下に行なわれた報告をまとめたものである。

司会（**高橋**）：今日は，この公開シンポジウムにお集まりいただきましてどうもありがとうございます。司会を務めさせていただきます高橋です。講演者のお一人としてこれからお話して下さる大脇先生の方で，標題の問題を取りあげるような企画をたてて下さいました。

今年は折しも国連が提唱しています国際児童年でございます。この年に当り，児童の人権とか福祉・教育等の問題についてあらためて考える必要があろうかと思われます。まず問題を広い視界から捕えまして，地球上の子どもという関点で見ました場合，地球上には約10億の子どもがいると聞いておりますが，この半数以上の６億の子ども達が飢えや病いに苦しんでいるという現実がございます。ここでは，子ども達の人権が守られていない，その守られていない子ども達の人権をどのように擁護するかという問題があるわけでございます。時々テレビのニュースなどでベトナムやカンボジアの難民の様子が報道されているのを見ますけれども，豊かな日本にいますとこういう発展途上国の子ども達が，貧しさのために飢えに苦しんだり，病いに犯されたり，果ては命そのものが失われているという現実について余り真剣に考えることがないと思いますけれど，この機会に改めて人類全体の子どもの問題として取り組む必要があるのではないかと思います。こういう状況では，子ども達の発達とか教育とかを考える以前に，生命そのものが脅かされようとしているぎりぎりの問題があるのでございます。

次に，豊かだと言われている国々―日本もその中に入るわけですけれど―そういう国々の子ども達の人権とか教育が，本当の意味で確保されているだろうかということをやはり検討しなければいけないのではないか，また物資が非常に豊かにあるような日本の子ども達が正しい姿で発達しているだろうか，というのがここで問われる問題だろうと思います。

そして最後に今日のシンポジウムのテーマになっておりますハンディキャップ児の問題をあげることができると思います。一度全体の中で身体的な面や，精神的な面でハンディキャップを負う子ども達の人権の確保ということについて以上のような文脈に照らして考えることは非常に有意義なのではないかと考えたのでございます。多少私事になりまして恐縮ですが，私は今，子どもの行動発達ということについて勉強しております。このハンディキャップ児の問題も，ハンディキャップという事柄を１つの発達障害の問題として捕えて，それぞれに発達の障害を持つ子ども達についてどういう教育をしたらその子ども達の可能性を実現して真の意味でより良く発達

させることができるか，そういう点から検討してみたいと思っています。

ここに居られるスピーカーの先生方は，現場でその問題に取り組んでおられるわけですが，その教育の仕方によりましては，子どもがハンディキャップを乗り越えてりっぱに発達することができるだろうという様に思っています。その子ども達が心底から幸福感を味わえるような教育とは，どのような教育なのかということが考えられたらよいと思います。障害という事実を外見の規準で捕えて健康な状態と比べここが足りないとか，なにかがどこかで異常だとかそういう様な評価の仕方も，もちろんあると思いますけれど，障害を持つ子どもひとりひとりを１つのシステムという様にとらえることができると思います。そのシステムの中には関連のあるいろいろな規準があると思うんです。その規準を見抜くことによって彼らの状況を理解することができると思われます。規準というものは，内的なものと外的なものとの２つあると思います。外的な規準に照らせば，確かに健康児よりは不足しているということがあると思いますが，内的な規準で捕えれば，その子どもなりの発達のすがたが良く理解できると思います。その内的規準に基づいてハンディキャップを持った子ども達に自分にできることを発見させ，その発見の喜びを原動力として発達を遂げるよう援助する教育がありうるだろうというわけでございます。

今日は，統合教育の問題が主になるわけですが，障害児の教育に関しまして，混合教育すなわちそれは統合教育ということになりますけれども，その問題が論議されております。この時問題になるのは，なによりも教育を受けるハンディキャップを持った子ども達とか，彼らといっしょに発達していく健常児の事が中心にならなければいけないだろうと考えているわけです。先ほど御紹介申し上げましたように，スピーカーの方々はいずれも，各々のお立場から障害児の教育や指導に取り組んでおられ，またそこからの理論的な問題を重点的に扱っておられる方々です。私から御紹介申し上げるより御本人から自己紹介していただいた方が，正確に伝わると思います。１～２分ずつ最初に今どういうお立場で，何をしておられるかということを簡単にお話いただきたいと思います。講演の順序は黒板にございますように，林先生，大脇先生，鈴木先生，高橋哲也先生の順でしてもらいますが，自己紹介はこれの逆の順序でしていただくことにいたします。では高橋先生どうぞ。

高橋(哲)：ずっと見回わしてみますと，やはりフロワーも女性の方が多いようです。私もスピーカーの方では男性ただ一人ということで何か女性に圧倒されてしまいます。戦後女性が強くなったと言いますが，教育相談のほうも女性が強くなったということでございます。私は名前が高橋哲也，哲学の哲ですが，親が哲学者にさせたいという気持ちでいたそうですが豈図らんや，もっぱら違う道を歩んでおります。私が所属しておりますのは，東京都府中市の第二小学校で，言語障害学級の主任をしております。私共のところには，府中市の幼児相談室，それから教育相談所の分室というものを併設しておりまして，私はまたその責任者も兼ねております。もっぱら教育相談を中心として言語障害児・難聴児を中心として幼児相談室は３歳からハンディキャップを持つ子ども，保健所あたりでピックアップされた幼児を扱っております。教育相談所の分室と申しますのは，実は今さかんに問われておりますが心身障害児の就学相談を中心にやっております。どちらかというと私は，教育相談の方が重点でございまして，そこから普通学級又は身障学級，言語障害学級，情緒障害学級，難聴学級，肢体不自由，虚弱それから盲や聾の学校の就学相談を主に担当しています。私が今日，申し上げることは教育相談を通しまして，普通学級に行った子ども達がその後どうなっているか，いわゆる普通学級に入ったハンディキャップを持つ子ども達が，普通学級の中でどのようにしているかということをアプローチしてみたいと思います。

鈴木：早稲田大学の文学部の教育学に最近戻りました鈴木陽子と申します。私は小さい頃，園田高弘さんのお父さんがやってらした絶対音教育を受けていたものですから，戦時中爆音なんて当てたことがあるんです。Ｂ29の爆音を当てるのが小学校の音楽の授業だったんです。それが私は本当に学習障害じゃあないかと思うんですが，漢字なんかは間違ってばかりいて母親がとても苦労したそうですし，右と左が今だにわからなくて車に乗っていて，「ほら，右」なんて言われて左に曲っちゃったりして‥‥そういう所があるんで，発達的に何かあったのかもしれないと思うんですけれど。その様なのに絶対音教育を受けていたからかどうかわかりませんが，全部Ｂ29だの和音というものを絶対に間違えたことがないんです。それで受け持ちの先生がビックリして慌てて大学の研究室に連れてって，それがたまたま大脇先生のお父様の研究室だったんです。そんなことがあって今日は，本当に受けてはいけないと思ったんですけれど，御縁があったのかと思いスピーカーを受けさせていただきました。

また慶応大学の小川先生の奥様が私の中学高校時代の恩師で，頭が上らないくらいお世話になったんです。その小川先生に聾学校手伝ってと言われて聾学校に入ったのが因縁で，大学時代から教育大の聾学校に移って20年近くなります。そんなことをしていて２年前に早稲田大学で教育心理学をする人がいないからどうしてもというので戻ってきたんです。まだまだ教壇に立つとドキドキするほうで，「皆な出なくていいわヨ」なんて言っているくだらない教師なんですけれど今日は，こういうことで話させていただきたいと思います。

大脇：私は，教育の方の心理を出たものですから臨床の方に興味を持っていまして，仙台でしばらく精神衛生のような方面，特に小児の精神衛生をしておりました。そして友達の誘いで東京の方に出てきまして10年ぐらいになりますが，その時勤務先が新宿にありました。聴力言語障害センターで，そこでは成人といいますか，聾の高等部出た人の所へ行くのかと思っておりましたら，豈図らんや，小さい２～３歳の乳幼児のいろいろな診断や判定・訓練ということをやり，そこで始めて難聴児に出会いました。そして厚生省との関係からどうしても今の教育体系に疑問を持ったり，あるいはもう少し自由な立場でやりたいという御両親が多くみえられ統合教育のようなことに入っていきました。ですがこの夏に，それこそ統合されたのかもしれませんが，視力障害と肢体不自由とこちらの聴力・言語障害がいっしょになりまして『国立身体障害者リハビリテーションセンター』というなんともバカでかいものができまして，今，毎日150mぐらいの廊下を５回も６回も往復して皆なおなかがすくなんて言って，お昼から大盛りの御飯を食べています。まだそういうものですから，いろいろな点で揃わないんで，過渡期なもので「アァ私，公開講演引き受けたけれど失敗したな」と思っておりました。それでもどうにかここまで漕ぎ着けて，今日は皆様お越しいただき，喜んでおります。私は，そういうものですから直接的に学童まではタッチできない立場でやっております。この間，カナダでのリハビリテーション国際学会のメインテーマ＜予防と統合―80年代に向って＞と出ていましたので，これはやはり新しくて良いトピックじゃあないかと喜んでいます。まだ障害児というのを，ほんの少しのぞいているばかりで，私など現場でいろいろやっている方に比べれば，足をつっこみそこなっているような状況ですけれど，今までの経験を今日は，お話ししたいと思います。

林：私は，大阪からまいりました。大脇先生に現場の様子はどうだろうかということで，報告してもらいたいと頼まれました。私は理論もなにもわからなくて，ガムシャラにやっているんです。小学校で集団ということを考えてやっている以外に別に理論性もなく，この子をどうしたら良いのだろうか，40人近く子どもはいるんですが，千差万別で私のクラスには，たまたま養護学級から来た子はいないんですけれど，ハンディを持った子どもはかなりいるんです。今日は２人しかレジメには書いていないんですけれど，他にも盗癖の子もいますし，数えあげれば，限りがなくどうしたら良いかわからなくなり私１人の力ではできないので，集団の中でなんとかならないかと思いつつ，毎日その子らと接しているんです。そういう現状の報告ということで特に血友病の子どもと，集団に参加できない子どもについて知っていただければと思います。血友病の子どもは，集団参加はできますが，しかしギャップがある為に，安全会というものに入りながらも，打撲して負傷した場合にはそれに対しての保障をしてもらえないという国のありかたの問題も出てきています。そういうことをいろいろ聞いてもらって普通学級の中で，なんでもないように見える子どもの中にもいろんな子どもがいて，彼らを健常児として指導していくのはどうしたら良いかということも，また皆さんの中から意見がありましたら，聞かせていただきたいと思ってまいりました。

司会：それでは林先生引き続きですが，クラスにおける集団参加の側面からお願いいたします。

林：レジメが大変汚なかったり，不明確になったりしていますが，一応私の解釈で理解していただきたいと思います。始めに血友病児童の集団参加ということで，Y君についてお話します。この児童は，３歳の時血友病ということがわかりまして現在でもその為に苦しんでいます。体も小さいですし，細くて席順から言えば，20人中４番目ぐらいに並んでいます。普段も血色は悪いのですけれども，出血したらしい日には，特に顔色が悪いのです。しかしそういうことにもめげずに非常にがんばっている子だということは，この日記を読んでもらうとよくわかると思います(日記1-1参照)。打撲して足がふくれたり傷をしていることは絶え間ないんです。それだけいたずらが多いとも言えます。だけどそういういたずらをしながらも随分心の中で苦しんでいて，夜寝ていても夢の中にそういった苦しみが出てくるようです。それは，５月６日付の日記なのですが『今日，僕は夢を見た。その夢は，服部緑地，夢の中で足が治った。足が治った

から走っているのです。』と書いているんです。それで，『アキラちゃん アキラちゃんと 繰り返しているのです。パッと目をさましたらそれはお母さんが僕を呼んでいたんです』って言うんだから，５月６日頃には，別に事故をやったということは，わからなかったのですが，やはり自分がなにか足の痛いことをやりその為の苦しみがあって夢を見て，そういう日記を書いたのだと思います。７月26日付の日記(日記1-3参照)，これは打撲した時のことなんですけれど，後の方に述べておりますが，学年でポートボール大会をやったんです。そしてその時，やはり選手ばかりが出てやりますので，すごい力で蹴り飛ばされたんです。普段だったら少々の打撲でおさまっているはずのものが，関節を打撲しますと危険になるということを後で知り，その打撲後１カ月ほど学校へ登校できなくなりました。その間はいつも血が流れておりますので痛みが止まりません。歩くこともできないという状況でした。それでこれは夏休みに入っているんですけれど，あと１週間で海へ行くのに間に合うかと心配しています。『外へ遊びに行きたいけれど 足がひどくなるばかりだから僕は毎日歯 をくいしばっています。』という 日記があります。それから７月22日付の日記（日記1-2参照）にも『今日の晩飯は焼肉。僕はそれが待ち遠しくてたまりません。野球の応援の時も焼肉のことが頭いっぱいです。でも少し残念なことがあります。僕はまだ足が治らなかった。野球には出られない。もしも野球に出られたら，帰ってきておなかがペコペコになり風呂に入り焼肉を食べるとおいしいだろうなと心の中で思っていました。』と いうことが 書いてあるんです。またお母さんや家族の人も大変協力的で，彼の体の発達を願っていろいろと力を貸しているということが日記から判断できます。お母さんと野球をしたというのも出ています。水泳なども親子で行ったりしていろいろと努力していらっしゃることも聞きました。

次に友達関係について 発表します。 彼は，乱暴な為に，子ども達が逃げてしまうこともあり，３年生の頃には人をたたく癖があり気にくわないことがあると平気でたたいたりしていました。しかしこの頃では，クラスの中でソシオメトリーを取っても（ソシオクラム参照）人気がある順で２番目に当るんです。ただこの子の場合，人気のありかたにちょっと問題があるのではないかと感じました。つまり三角関係になっているんです。三角関係になった場合学級集団の中で教師にとっても，他の子ども達にとってもはた迷惑な行動が行なわれるのです。Ｙ君と遊べる子どもを中心として２人はいつもＹ君に従い意見が一致するのです。３人の行動は，他の子ども達に目もくれず勝手なことをしてしまうのです。これを何とかしたいという気持ちで今，観察中です。他にも，楽しい遊びができるから他の子からもソシオメトリーでも好かれていることがわかります。彼を嫌っている段階の子もいるんですけれど嫌っているのは，Ｙ君の遊びのおもしろさがわからない子のようです。Ｙ君を外から傍観して，「変なことばかりやっている」という見方をしているんです。それで排斥しあっている子どももいます。Ｙ君の顕著に表わす行動としましては，不満とか争い事とか怒りとか攻撃的な傾向が非常にみられるんです。私とはコミュニケーションができましたので最近は納得して，フンフンと返事はしてくれるんですが，内心は何か僻みを持っているんです。それを取らなくてはダメなんではないかと思って，お母さん達にも話をしたりして相互理解ができるように努力していますが，仲々そういう荒々しい行動は 消えて くれません。“権太”だけでなくそういういろんな堅い感情というのがどうしたら取れるのかと今ちょっと困っているんです。

この児童は20歳ぐらいになれば赤血球の量も増え，普通の人と同じ量になると言われているのですけれども，やはりそれまでの教育というのは，幼年時代・青年時代に向って進む過程で，非常に大切なものであると思います。こういう集団の中でどの様にこの子を位置づけ指導していったら良いのか，毎日悩まされております。それで学習も運動も良く出来ますが，彼の顕著な行動というものは，病的なものから来ているのではないかと一応判断しております。 誰でも３年４年生は権太盛りなんです。この子は，３年生，４年生と持ち上りまして今教室のコミュニケーションは良くできているんですが，この子が他の集団に入った場合自分なりにどう対処できるであろうか，そういうことができる力をどのようにしたらつけられるか，今悩んでおります。この子は障害を持っている為に，日本学校安全会というものに加盟して，一応普通健常児と同じにその安全会にお金をはらっているんです。普通なら学校で怪我した場合それに対して使った分のお金が返ってくるのですけれども，ポートボールで打撲した件に対しての保障というのが血友病のために中止されてしまいました。

Ｙ君は我々の教育の中でのいろいろな問題とからまって二重にも三重にも苦しんでいるということを良く教えてくれましたが，私にできることは，集団での扱いということで今一生懸命やっているんだとしか言えません。それも効果は少なく，やるだけの成果は見られません。

次に，集団に参加しにくい児童なんですけれども，Ｋ君というこの児童も，３年間私が担任してきました。こ

の子は，非常に気が小さいんです。幼い頃のことを聞いてみますとおばあさん子で，お母さんが働きに出ている為に，おばあさんに預けられたそうです。両親ちゃんと揃って兄弟も姉もいる普通の家庭なんですけれど，たまたま母親が働きに行ったが為におばあさんに育てられ身の回りのことは全部してもらったということを聞きました。幼稚園では遊びがうまくできず，様子を見ていても活発に参加しようという意欲がなかったと聞いています。それで就学した当時は，学校が嫌になって登校拒否みたいになったりして，いつも学校でメソメソしていたということです。2年当初，私が受け持った時にも，もう全然活発さがなくショボンとしているんです。そして何か聞かれるとすぐ泣くんです。別にいじめているわけではないんですけれど反応というものが，全て泣くという形で出てきます。それでもう勉勉という段階ではなく集団の中に入れるにはどうしたら良いかと必死に思っていたんですけれども，2年の3学期頃から係り活動というものに喜びを見い出しました。係り活動といっても学習係というものに選ばれたのです。自分も希望していたように思われます。そのうち作文に『皆をどういう風にしたら静かに学習してくれるだろうか。』とか『同じことばかりしていても飽きるし，どうしたら良いだろう。』という心配事が出だしました。その辺から集団参加という事がちょっと見えてきたと思います。そしてやはり友達がないので友達が欲しいと書くようになってきました。いつも親からは，自分より年下の子どもとしか遊べないと聞いていたんですけれども，作文に友人が欲しいと（普通本当に作文も1～2行しか書けません）書いているのでそれだけでも偉くなったと私は，喜んでいました。そうしているうちにクラスのA君とビー玉をしているのを見たのです。その事は私にとって大きな喜びでした。そしてA君はソシオメトリーをとっても非常に人気のある子なんです。学習も良くできるし，それから遊びもうまいんだと思います。そして人の悪口も言わず，おとなしい子なんです。運動神経もあっていつもリレーの選手として出ています。ビー玉遊びをしたというのは，当のK君がたまたま運動会のリレーの選手に選ばれたり，水泳のリレーの代表になったりしたからということもあるんですけれど，そういった参加が，この子どもにもできたということは，K君にとって大きな変革だと思います。彼はリレーの選手と言っても平泳しか上手でないんですが，ともかく平泳ぎは非常にうまくいきました。そしてそのキッカケは，家族で琵琶湖に行って泳ぎ，それが非常に楽しかったことらしいのです。作文でも，3行か4行ほどで『琵琶湖の水は冷たい。プールの水とは違う。』ということぐらいしか書けていませんでしたが，このことがキッカケらしいのです。そして，皆が彼のがんばっている姿を見て，リレーの選手にしようじゃあないかということで，運動会に出たのです。けっして上手に走ったとは言えないですが，すごくがんばる力を出したので皆なも選んでくれたんだと思います。K君も非常に喜んでいました。私も，1，2年の頃に比べてK君が大変変革したとうれしく思いました。しかし，4年生になってからも消極的な姿というのは消えておりません。4年では3年生の時のような変革もなく，A君とはチョコチョコ遊んでいますし，休み時間は鬼ごっことかをする大人しい集団の中で遊べるという段階です。教師が，こうしたらどうかと言ったら，出来ることなら応じることがありまして「4年生からは読書もうちょっとやったら。」と言いましたら，2学期ぐらいから誰も遊んでくれない時は教室で本をひっぱり出して来て静かに読んでいます。そういう全体を通して消極的な中にも，1・2年は不安な気持ちを泣くことによりいつも漂わせていて，2・3年になったらその気持ちから変化して，やさしさも出てきたし不満もあるしすねることもありました。4年生になりましたら3年と同じように，すねたり怒ったりしているんですけれども，その中で日記などで自分の気持ちを表わせるようになりました。3年生になって猫についての日記があるんですけれど，それが初めて沢山書けた文章なんです。ちょっと字も間違えているんで読みます。（日記2-3を参照）

4年生になってからの日記にしるされていますけれど（日記2-1参照）運動面でもっとのばしてほしいという気が私にはありました。そこでお父さんにお願いしているのですが，その時彼がお父さんとのコミュニケーションが非常に薄いということがわかりました。K君は，「友人と野球でもやったらどうや？」と言うと，近所のいつも遊ぶ子と野球を1回やったという日記があります（ここに書けなくて申しわけないんですけれど）。またK君は学習のテンポが非常にスローなんです。出来ないとは言えないんですけど，どういうわけか非常に遅くスローモーションで，足し算引き算にしても3ケタになったりすると繰り上り，繰り下りももうごちゃごちゃになってスムーズに行きません。1ケタの計算でも10進法であれば計算がうまくいきません。今日わかっていた算数でも，他の日にやってみるともう忘れかけているということもあるのです。そういうことでビックリさせられるということもありますけれども，そうかと思うと覚えていて非常に良い点が取れるということもあるんです。能力的に，一般の子どもと比べどうなのか，どういう規準

で成績をつけたら良いか困っております。結局皆からは，日記にありますように(日記2-2参照)，「今日，僕算数のプリント100点にしなければならないから放課後残って書こうとしてもわからなかった。」学習係りが残っていてくれたのですが遊んでしまって全然K君を見てくれなかったんです。そうしたところが，日直さんが怒り，「はやくおまえがやらないから帰れないじゃあないか。」という調子で非常にK君をいじめてるんです。それで，私は知らなかったんですけれど建て前と本音は違うということで子どもの世界でもそうとうひどいもんだなということが，このK君が書いてくれた日記でわかりました。机をけったりとか嫌がらせを散々して結局K君はわからずに帰えったんだと思います。そして翌日K君は言ってくるかと思っていたら言ってこないし全然知らん顔しているんです。私は日記で判断したんですけれど，その後で全員に一応指導はしておきましたが，やはり本音と建て前はいつも違って子ども達は遊びたいからスローなK君に構っておれず，K君は嫌われています。それでK君はクラスの皆に排斥されて3年生の一時期友達なんか欲しくないなんて言っていたり3年の時にやったソシオメトリーでも誰にも興味を持っていませんでした。4年生になるとソシオグラムにありますように，自分の好きな子ができました。だけれども誰からも好かれるということはありません。そういう段階でやはりK君も友達を欲しいというし，なんとかしてやりたいなと思うのですが，遊びができないということと，学習のテンポが非常に遅いということでどうしたら良いものかと思っております。塾なんかにもお母さんが行かせていますが，塾へ行ってやればやるほど学校のいろんなことができなくなって，いつも宿題を忘れてくるということになってくるし，非常にその辺で困っています。それでそれに対してもいろいろ御指導がありましたらお願いしたいと思います。

司会：それでは，只今のお話でわからないところがありましたら御質問をお願いいたします。

某氏(所属，氏名不明)：今日のテーマの<普通学級で育つハンディキャップ児>ということですが，そういうことについて今御発表になったと思うんですがハンディキャップ児は特殊学級とかで普通はやるんですが何故こういうテーマをおつけになったのでしょうか？

大脇：それは私のところで申し上げようとしていたのですが，結局歴史的に見て特に特殊児童は，特殊教育ということでございましたけれど，その中からいろいろな問題が出てきているわけなんです。昭和48年頃でしたか，文部省もやはり特殊児童というのは普通学級の中でいろいろな学習の機会があり，社会慣習なり交友関係なりが育っていくことにより，より伸びる可能性があるという見解のもとに進めているわけです。そういう点でそれは文部省の意向なんですけれども‥‥。

某氏(所属，氏名不明)：そこに問題があると思うのですけれど，少し脱線になりますが，文部省の態度，それから教育庁ないしは教育委員会，校長そういう人達のこういうハンディキャップをもった子どもたちに対する態度というものはどうであるかということです。私の言いたいことは，こういうのはやっぱり普通学級に入れては普通児が犠牲になるということです。普通教室で育てますと，1人の為に多人数が非常に犠牲になるということです。そういう点指導監督の立場にある人は，見解をもってハンディキャップを持った子どもを普通学級で育てることをさせているのでしょうか。

司会：その問題は後の討論で活発にやっていただきたいと思いますので簡単な事項についての質問だけお願いいたします。

斎藤(慶応大)：ソシオグラムの同心円の中になればなるほど社会性があるという尺度ですか？

林：そういうことです。

司会：それではひき続き，大脇先生にお願いします。

大脇：私は難聴児問題を紹介します。普通学級に在席する特殊児童が増えていますが，一人一人が色々な問題をそのハンディキャップに基づいて持っています。普通学級に通うことは，社会経験，学習の機会，意欲などの点でよいと言われて来ましたが，安易に進めるとその過程は思ったより多くの問題に直面するでしょう。この困難な集団生活を少しでも有効なものにするために様々の前準備と多数の人々の強い意志や理解協力が必要とされます。ブルースは難聴児の統合教育は早くて6歳から3歳までに，遅くても高校年齢になされるのがよいとしています。そしてその効果的結果は各個人のパーソナリティ，準備体制，カリキュラムによると述べています。それで今回はその中の一，二点普通小学校入学のための準備体制がいかになされたか，教育訓練方針を述べ，現在の学校生活についての作文「ぼくの学校生活，わたしの学校生活」について分析考察した結果の一部を述べたいと思います。

乳幼児期の難聴児には聴力程度の判定，聴能発達・言語発達や行動発達心理検査や教育聴能評価をしながら聴能訓練と親へのガイダンスを行っています。そしてどの程度聴こえているのか，どんな音や音声なら聴えるか，

又育児上の疑問について答えて行きながら，将来性のある教育方針をさがしていきます。一般的に言える事は動作は自然で言葉を伴い言葉は明瞭簡単に話者の表情をよく見せること。言葉を多くし，子供の動作を言葉に直すこと。会話を中心とした自然な言葉に注意して口元を見る態度が出来て来ます。物に名前がある事，動作や表情に言葉がある事を理解して来ます。聴力が高度である程感覚訓練は重ぜられます。補聴器に興味と効果があらわれ残存聴力も活用されて来ます。言葉をかけても理解していないし反応も少ないがコミュニケーションが次第に進むようになれば確実な方針へ進めます。普通児との遊戯や生活体験を同じ様に持たせます。訓練中は遊戯の中に効果的に音や音声を導入しマイクロホン聴能訓練器，スピーカーテレビ，テープレコーダー，カセットテープ，聴能訓練用電話器等の使用に慣れさせます。

第１例は K.D です。沖縄在住で中学入学をひかえ東京へ転校を希望し，夏期休暇に聴能と算数，国語の教科指導を行いました。母体の風疹による難聴児で補聴器装用による聴力は平均70dB，読話が上手で音声も大方理解出来ます。２年半の聴能訓練を受け，ろう学校幼稚部から普通小学校へ入りました。当時補助学習は塾と家庭だけで行っていました。転校希望に際し難聴学級はあるのですが普通学級への集団適応が困難で問題になるでしょうと積極的には賛意しませんでした。はたして２カ月余りで学校に行きたくなくなり沖縄へ帰りました。弟も転校しましたが全く問題は生じません。次の F.M は幼児期の３年間隔週に来所しました。２年目頃から非常に知的方面の成長が著しく，課題をすべてこなす程になりました。家庭学習も継続的に行なわれ，入学時には普通校へはスムーズにすすめました。親戚と兄に難聴が見られました事も両親の難聴児保育の理解力があったためと思います。次の H.K は母体の妊娠中の風疹による難聴で，父親も片耳に難聴がありました。又，本児の左眼は殆んど失明していました。弱々しい成りの小さい子でありましたが素直で学習態度が良好であり３年間毎週来所しました。会話力はのびませんでしたが，課題はよく消化しました。難聴学級に入れたため何の心配も入学時にはありませんでした。

F.T は身体障害程度等級３級なのが補聴器装用により50dB 位の非常に補聴効果が上り，音への興味を持っていました。文字言語も早くから入り漢字，アルファベットへの興味も早く，言語が習得されました。音声はかすれてやや聞きとりにくいが，読書力があり遊びも上手でありました。ここでの訓練の後学習塾に変り私立小学校へ通学をしています。

S.N は２年９カ月間隔週の訓練をしました。教育方法は普通と程んど変りなく，地元の児童相談室での訓練もうけて普通小学校へは難なく入れました。

K,R. も２年間の訓練は月に２回であり，補聴器の常用が遅れたため訓練体制に入りにくく効果的訓練が進みにくいでしたが，難聴程度が低かったためこれも入学時の困難はありませんでした。

K,I. は兄も難聴であり，弟の方が中等度難聴であったため家庭での教育を熟知しており，兄弟共によく指導が行なえました。

Y,M. は２歳代から訓練を行いました。やや集中力と自己統制力に欠けていたため訓練は予定通り進まず態度形成に時間をとりましたが活発でありました。家庭教師をつけ習い事に熱中しており，バレー，エレピアンとよくリズムにのる事が出来ます。言語表現力は幼く動作も多いが，学習に次第に意欲が出て来て英語を好んでいます。

T,S. は四肢に軽度の麻痺があり，聴力は中等度でありました。知的面の成長が良好で訓練は手指の運動や両手の協応を中心に書字の練習が中心になりました。言葉は早くてやや不明瞭なところは残りました。以上の難聴児について訓練中は保育園，幼稚園を訪れたり，担当者と懇談したり，入学時には学校教育委員会担任あてに報告書を出してきました。今年の国際児童年参加行事として「僕の学校生活，私の学校生活」という題名の作文集を募集しました。上記９名についてこれを学校適応の面からまとめて考察しました。１名が「体育祭」と題して参加した競技ルールについての説明でありました。この作文を12項目について分類しました。平均年齢18歳８か月で潜伏期にあたり，友人や友人の中での自分を書き出しています。競技で何等であるかに注目しています。学校行事に78%がふれており，次が学科，教師との間のこと友人の態度，難聴受容です。学科目については少ししか出ていないと思います。難聴受容，自分の耳と言葉にふれたのは半数であり，教師の特別の配慮については敏感に記憶している様であります。中学生については先生の大勢になった事に特に関心を示していました。又11歳児は今度中学になった時，友達が変わるから組変の時と同じ目でみられる事を心配しています。中学校に変わる事の負担の大きさが出ていましたが，将来の希望にやはりがんばるつもりと覚悟ができていました。私は林先生の言われた様に細い学習能力や態度，集団内活動の様子は述べられませんが，統合教育を学習面で行うには，色々な条件と準備期間が重要であり，統合教育の日々には絶えず家庭や周囲の人，それから私たちの様なそれを推

進した臨床心理士にもぐらつきがみられ教師も勢一杯努力されて行っている事です。今後は各児童のパーソナリティによって色々な問題を自己の力で解決して行くでしょう。Reynold や Birch は適切な社会性と情緒的成熟をもつことと，独立心と自信や成功への意欲が重要であると言っています。

司会：それでは，鈴木先生，お願いします。

鈴木：さっき，フロワーから，障害児は，「障害児学校，又は，特殊クラスへ」ということだったんですが，私のようにお嫁にいくまで，また子供ができるまでぐたぐた勤めてきた者にとっても，もうそれは無理なんじゃあないか，Integration は世界的な傾向で，80年代は制度の上でも Integration について議論されるのではないかと思います。

日本も，今年から完全就学になりました。養護学校が義務制になり，事実上，みんなが学校に行けるようになったはずです。それは世界では4番目，スウェーデンが1968年に，1971年にイギリス，昨年がアメリカ合衆国，今年度が日本――，こうやって世界を見廻してみると，やはりそうなっていくのではないかと思います。この頃，私，文部省と縁が切れちゃったものですからはっきりしたことはわからないのですが，特殊教育課が来年の4月にむけて，30万部ほど，普通学級の先生に障害児を理解してもらうための小冊子をつくっていると聞きました。それにきのうラジオで，特殊教育学会が，――こんな会員ではしょうがないのですが――，来年度からでもできるだけ早く教職の課目に障害児教育を入れて必修にしようと決議したといっていたんです。研究室の若い人に言われて，「なんだ，先生知らないのか，聞いていなかったのか？」と言われてしまいました。確かに，そういうことはあり得ると思います。このような社会の情勢だから，私が，こんなにぐたぐたしているというのに，早稲田に戻って教育心理学のほかに障害児教育という講座をもっているのもふしぎなことではないと思うのです。文学部では一般教養として障害児教育を取るようになっていますが，取りたい人が多いようで抽選になっているようです。教育学部では，教職の選択課目に入れています。これも歴史の必然ではないかと考えます。それをわかっていただく為にも，テーマの“学習障害をめぐって”についても，始めから私的なことばかりお話して恐縮なのですが，その方がわかりやすいと思いますので，そのようにさせていただきます。

さっきもお話しましたように，ここの小川先生の奥様が，私の世話をかけっぱなしの恩師で，そのお嬢さんがろう学校にお入りになったため，そこの幼稚部で絵画製作を担当することをお受けしました。

当時の日本のろう学校，――20年ぐらい前のことになりますが――は，今のように，「できるだけ普通児の集団の中に入れて日本語のお風呂につかわせてろう児を育てる」などということは，一般にはまだとんでもないことで，まず一斉にろう児を椅子にきちんとかけさせるんです。そしてそのしつけができてから，「立って」と口形を見せて読話させて立たせ，それからまた「かけて」と口形を見せて読話させてかけさせる，というようにしてことばを教えていたんです。それを当時見ていまして，ポロポロ涙を流した自分を思い出すと，なんてオセンチだったのかと思います。当時，お友達にも手伝ってもらおうと思ってさそったのですが，女子校のお嬢さん学校だった為か，結局，みんな，「お嫁に行けなくなるからダメだといわれた。」などという理由で断わられました。

私のところは父親が医者で肢体不自由児などに接していたこともありましてか，「そんなら君一人で行って来い」ということでしたので，大学で勉強している間，ずっとお手伝いしておりました。

この，小川先生のお嬢様がいらしていた日本聾話学校というのは，以前駐日大使をしていらした，――若い人は知らないかも知れませんが――，ライシャワーさんのお父さんがお建てになった学校なんです。それで，新しい教育方法，聴能機器がどんどん入ってきて，日本のろう教育の中心になっていたような学校でした。で，その中で，できるだけ早い時期から補聴器をつかって――，今だと3～6か月ぐらいに聴えないことがわかるので，それからすぐ装用するようですが――，こんな風ですから，今では乳児教育をどうしたらいいか，ろう教育の一つのポイントでもあります。

このように，早期から聞く訓練をして普通の子と同じ方法で，できるだけ言葉を習得させようという Natural Method というのがアメリカ合衆国で当時もてはやされていましたので，それを日本でもやってみようということだったのではないかと思います。

言葉の風呂を整えたり，Natural Method を実行するには，かえって今までのろう教育を知らない方がいい，ただの女の子が，絵の先生にでもなって来てくれて，子どもたちと仲よくなってくれる方がいいのではないか，ということで，私が呼ばれたんだと思います。

すると，子どもたちはたちまちこの時間が好きになって素晴しい作品を作るものですから，テレビ局までとんで来るさわぎで――。

今こんなことを聞いても，皆さんは，そんなことあたり前じゃないか，脳がおかされているわけではないのだから，とおっしゃると思いますけれど‥‥。

その後小川先生のお嬢様は小学校，中学校，高等学校，大学と，一般学校で勉学なさいましたね。そしてそのあと，“細胞診”っていうんだと思いますが，顕微鏡で細胞をみてガンを発見する特殊な仕事があるんです，——スェーデンではろう者の専門職の一つにすでになっているようなのですが——，そんな仕事をしていらっしゃいます。

こうして考えて来ますと，「ああ，もう，末梢性の，耳だけ悪い子っていうのは，普通学校で育っていった方が，言葉の風呂につかれるからいいんだな。」と皆さん思って下さると思うのですが，当時は大変なことでした。

今は，そんな時代が他の障害児たちにも来ているのではないかと思います。

ろう教育の中では，こういった末梢性の聴覚障害児の教育方法は一応メドがつき，できれば普通学校に行かせながら Natural Method をとる，ということがあたり前のことになってきました。それだけでは足りない部分もあるので，個々の子どもに合わせてお母さんや先生はその他いろいろな工夫をなさってはいらっしゃいますが‥‥。

それに教育をはじめる時期も3～6か月ぐらいになれば，特別な教育方法はむりでしょう。

このような反面，ろう教育ではその後，脳の中が悪くて聞こえないらしい，話せないらしい，というような，中枢性の障害児が浮かび上ってきました。そうした子がアメリカ合衆国では aphasic-children とか brain-damaged と言われていたようで，それも日本に入ってきました。ここに昔の本を持ってきてみたのですが，こんな本が出ています。——“Aphasic Children——Identification and Education by the Association Method——” 1963年に McGinnis という30年間ろう学校の先生をしていた女の人が書いた本です。

この McGinnis がずっと働いていた Central Institute for the Deaf というのは，皆さんもよく御存知の勝木保次先生が聴覚生理を研究していらした所で，耳鼻科関係の先生など戦前からよく出入りしていらしたところです。私がアメリカから帰った1965～66年頃抄訳して小さな雑誌『ろう教育』に出したことがあるのですが，その時，連絡をとりましたら，女史はすでに他界されておりました。

この McGinnis と C.I.D. (Central Institute for the Deaf) で御一緒だった頃があるのではないかと思いますが，今ここにお見えになっている森永先生達がお訳しになった『学習能力の障害』——Learning Disabilities——Educational Principles and Practices（日本文化科学社）の共著者である H. R. Myklebust が，ろう児の教育を考えるためには“中枢性のろう”と“末梢性のろう”を分けて考えなくては，と言っていたのが，当時すでに日本に入っていました。それは1958年から2年間，フルブライトでノースウェスタン大の Myklebust の所へ留学していた私共の先輩である教育大学附属ろう学校の佐野文子先生がすでに現場に持ち込まれておりました。

今でこそ，こうして大きなことがいえるのですが，当時は“ろう教育なんて”といわれて社会の片すみに追いやられていた時代でしたから，Myklebust といったら“学習障害”の本を書いた人と皆さんは思われていたかも知れませんが，彼は以前にこのような研究をしたり，本を著している人なのです。

この本が Learning Disabilities の最初の本だ，という人があるので，もしやと思い，はじめのページをよく見ましたら，Original English Language edition published 1960‥‥となっているんです。どなたかこの Original Book について御存知の方がおられましたらあとでお話くだされば幸いです。ですから，ろう教育の中の流れと学習障害の語はやはりつながりがあるのではないかと思います。少くとも Myklebust の頭の中ではつながっています。

このように，ろう教育や言語障害児教育の現場には，学習障害という語は使っていませんでしたが，やがてその語の中に後に集約されていく aphasia とか中枢性の言語障害，中枢性の難聴という語がかなり早くから入っていて使われていました。

また一方，整形外科学から肢体不自由児教育に入ってきた“学習障害”の研究の流れも現場にはかなり蓄積されています。高木憲次先生という一生独身で肢体不自由児の療育のためにすべてをささげられた東大のお医者様がありますが，そのお弟子さんでおられた田口恒夫先生が，戦後いち早く渡米なさり，いろいろ持ち込んで来ておられます。日本の障害児教育の中には，学習障害に関して少くともこの二つの流れがあると思います。

私が1964～5年アメリカにおりました時は，当時上司だった教育大学附属ろう学校，今の筑波大学附属ろう学校長，萩原浅五郎先生が，これからのろう教育は中枢性障害の Language の問題を考える必要がある，といわれたこともあり，私は，ヘレン・ケラーが学んだことの

あるパーキンス盲学校の重複部で交換教師をしながら，Harvard 大や Boston 大学で学んでおりました。

すでに米国は1953年文部行政と厚生行政が一緒になって，厚生・教育・福祉省をつくってからはや10年以上経っておりましたこともありましてか，パーキンスの校長は，小児科学会で Rubella-child——風疹児ですね——について発表したり，地域の医師会の会員が，学校に講演をしに来てくれたりしておりました。

このように教育現場と医学との交流があったためか，Hyper-kinetic children とか，Emotional-disturbed child という言葉が校内で使われていました。また，フロスティッグ視知覚発達検査も使っていましたので，Learning Disabilities の語も使われていたのではないかと思うのですが，あまり記憶がはっきりしません。

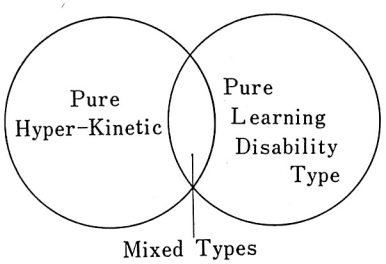
でも Learning Problem っていうのは，確かによく使っていました。週一度校内で開かれるケース会議のため，校医は午前中各クラスを廻ってあるき，生徒一人々々の，病院や相談所等から来た分厚いケース・リポートなどをもとに午後話し合いをするのですが，私の担任していた子が急に歩くようになったり，学習をはじめたり，排泄をするようになったりしたため，その子の Learning problem を cross culture の問題にして話し合われたりしたものですからよく憶えています。

そろそろ時間ですが，この後，米国では，アメリカ合衆国で生活しているプエルトリコ人の言語教育問題，白人と黒人が Integration している学校の教育問題が Learning Disabilities の語と共に語られるようになるので，この語には，そうした面も含めるのではないか，と思われる方があるようですが，できるだけそれは含めない，というのがアメリカでの L.D. の中心的な使い方だと思います。やはり脳に何らかの障害を仮定できる場合にだけ使うことば，それが Learning Disabilities だと私は思っています。そしてその何かを仮定する時に使う語が，微細脳損傷・微細脳障害という語だと思います。行政面でも医学と教育が一応統一されてしまっている国ですから，医学の中でもこうした仮定用語が平気で使われるんでしょうけど‥‥。いい方をかえれば，minimal-brain-dysfunction とか，minimal-brain-damage ということが仮定されるときはじめてでてくるものが Learning-Disabilities だといえるのではないでしょうか。このように，仮定の上に立っている語なので，その語の定義も一定しません。だから一応，知能とか視力とか聴力，運動能力，情緒面で異常がないのに学習上の欠陥がある場合が Learning Disabilities という学習障害の定義になっているのではないかと思います。

またそのうちにある“微細脳障害”というのは，すでに1966年，アメリカの厚生・教育・福祉省から，パンフレットが出ております。それは，National Society for Cripple Children and Adults——日本の肢体不自由児協会のようなところといったらいいでしょうか——と，公衆衛生局の Neurological and Sensory Disease Service Program の共同委員会でまとめられたもので，簡単に訳文を読みますと

「微細脳障害症候群とは，知能はほとんど正常か正常以上でありながら，いろいろな程度の学習や行動の異常があり，しかも中枢神経機能のかたより（deviation）をともなうものをいう。この中枢神経機能のかたよりにより，認知，概念化，言語，記銘，注意の集中，衝動の制御，運動機能の障害のいくつかが組み合わさってあらわれるものである。」と定義されております。この微細脳障害の概念が日本に入ってきて，公式な場で討議されたのが，1965年，東京で開かれた国際小児科学会のパネルの一つ，“精神薄弱，とくにその治療”で，みなさんの中には心理の中にまずとり入れられたと思っていらっしゃる方もおありのようですが，I.T.P.A. と同じに，まず医学の中に入ってきて，それを心理関係の人が訳したりしているんです。

この微細脳障害による症状を大きく分けますと，Peters 等は，次のような二つの円，すなわち一つは今私共が問題にしている“学習障害”と，もう一つの円，すなわち“行動障害”を表わすものとに分けられると次のような図で説明しています。



そして，学習障害の方の症状として，左右障害，寡動，書字障害，読字障害，綴字障害などをあげています。そういえば私も，自己紹介の時ちょっとお話させていただきましたように，音をあてることは担任がびっくりして大脇先生のお父様のところへ連れて行くほどでしたのに，漢字の書き取りはずい分に手だったようです。今も緊張すると黒板に書く字がおかしくなることがありますが，やはり脳に何かあったのかそれとも漢字を教えて下さった先生がこわい先生でしたから，環境的な

ものから学習障害のような症状におちいっていたのかしら，などと考えることがあります。

この国際小児科学会のためでしょうか，その後，学習障害とか M.B.D. という語が私共の教育現場にも持ち込まれて来るようになりました。教育相談に訪れる親が，こういうことを言われたのですがどういう障害なのでしょうか，などと質問したり，問題児を診断してもらうと，M.B.D. の疑いがある，などとの御返事をいただくようになったものでした。

これはよく話す例なのですが，私が大学を出てはじめて教育大の附属ろう学校幼稚部で受け持った８人の３歳児の中に，どうしても末梢性の聴力障害児とはいい難い子がおりました。はじめは私の指導が悪いのではないかと考え，周囲の人もそういうので，ねむれない日を過しましたが，聴力測定が一定しないこと，お母さんが再び病院巡りをはじめると，自閉症，情緒障害，小児精神症などといわれるようになり一定せず，なんだみんなもわからないのかとなさけなくなり，どうすることもできなくて父親に八つ当りなどしたものでした。この子は，私がアメリカにいっている間に新設された難聴学級に転校させられたのですが，そこにも適応できず，帰国してからは放課後遊びに来るので，個別指導のようなことをしておりました。再び他のろう学校に戻り，高等部専攻科を終えて今は一応印刷所に勤めております。

この子について，去年死んだ主人が，東大小児科で診ていた時のことを，金原出版から出ている『小児言語障害の診療』に書いておりますので興味のある方はごらん下さい。

こんなわけで，この子は本当に指導のむずかしい子でした。その後教育大学の附属ろう学校で，中枢性の言語障害児を中心にした教育相談をはじめました。そうしましたら，たちまち，全国から40～50人の子どもが集まり四苦八苦でしたが，やがて校長先生が亡くなるとこの機能を校内で維持できなくなり，閉じました。

その後きちんと Follow up しているわけではないのですが，時折いただく親ごさんや子どもたちのたよりなどによりますと，当時，自閉症，情緒障害，発達性失語などといわれていた子が，今，学習障害といわれて，研究室の Follow up の対象になったりしております。

この子達のことは，一応，1970年に東京で開かれました“ろう教育国際会議”で発表いたしましたので，興味のある方は，その集録をごらん下さい。

この子達のことをふり返って考えてみますと，ろう学校に古くからある訓練的な指導を参考にして，かなりきびしい訓練を重ねた子の中に，中学を終ろうとする今になって，少しずつのびて来た，などという話を聞くことがあります。そうしたことはあり得るのではないか，脳の可塑性を仮定して訓練できるのではないか，などと思わされます。またリタリンなどの薬もたしかに有効な場合があったようでしたが，使い方にはよくよく注意しなければならないと思わされます。一方では，このような学習障害児といわれる子を担任したが故に，先生が精神科通いをするようになったなどという話も出るほどですが，そうかといって，はじめにフロアーから出たようなそういった子どものクラスをどんどん作ればいいというようなことは，Integration の世界的な流行に逆らうような気がします。今後20～30年経った時に，歴史の方向に逆らってしまった，などと反省しなくてもすむようにしたいものだと思います。まとまりのない話になってしまいましたが“学習障害”をめぐって，という話をこれで終らせていただきます。

司会：ありがとうございました。それでは最後に高橋哲也先生お願いします。

高橋(哲)：それでは，一番最後は私なんですが，時間の方も大部経過いたしまして最後の終了時間５時という司会者の方からのご要望ですし，教育相談では時間を守らなければなりませんから私も時間を守りたいと思います。

今日は準備が若干間にあわなかったものですから，口頭という形で申し上げたいと思っております。

テーマは「自閉症」というよりも，むしろ「情緒障害」ということでやりたいと思います。ご案内の方では「自閉症」となっていると思うんですが，実は私ども普通学級における心身障害者の理解と指導ということで２か月間継続して研究したことがありますので，そういうことで普通学級の中で大きく情緒障害児という問題を捉えてみたいと思います。それとテーマがもう１つあります。―肢体不自由児―非常に大きいテーマなので時間内ではたして言えるかどうか，これをかいつまんでですけれど申し上げたいと思います。

最近，とくに普通学級の中で，肢体不自由児の問題が非常に大きくクローズアップされました。特に“筋ジス”の問題が最近非常にクローズアップされてきた。それからペルテス病の問題がございます。とくに就学する前，新一年生にどこでも就学相談をやることになっています。これは全員就学を東京都が打ち出した昭和49年度の検討委員会諮問の中からすでに出ています。私は東京都ですから，その辺で申し上げたいと思っています。私は

就学相談で，ペルテスの子ども10名を扱いました。その中で新しいので正確な例から申し上げたいと思います。

一昨年に扱いましたケースなんですけれど，お母さんは「うちの子どもは筋ジス病でございます」ということで，実は非常に今歩行困難である。「松葉づえということで幼稚園にも行ってないんだけれども」ということで，就学相談の申し込みにまいりましたので私があたりました。その時，右足だったんです。右足の病気はある病院で約２年ぐらいかかるということだったそうです。そういうことで総合診断し，面接をした後，子どもの行動観察からあることを観察したんです。

実は観察する方法は２つあります。そして，はたして普通学級に入れていいのかどうか，それとも筋ジス病というのは肢体不自由の養護学校に相当するわけですので，養護学校がいいのかどうかはたして，じゃあ，場所によっては肢体不自由学級というのが実はございますが，これは主に軽度の子どもをあつかっております。ですが，この筋ジス病というのは医学の中でもかなり論議されている問題でありまして，私どもも長時間審議しました結果，とりあえず普通学級に入れようじゃないか。で実はおとどい私はその子に逢いました。私はだいたい一日一回くらい歩いている時に逢います。私が今ちょっと居候している小学校の２年生になっているんです。だからあおうと思えばあえるんですが，私は非常に忙しくしていて（私は今，独立というか，センター方式ということになっていて学校へ居候しているくちであり，学級の方は学校の方の管理監督に入っていますが相談の方はまったく別ですから），漸くこの前本人にあいまして，普通学級の方の担任にはしょっちゅうあうわけです。私は行動観察を今みているんですが担任からこんな話がありました。「先生，最近ね，ちょっとくすぶってきたんです。Aちゃんなんか元気がないんです。先生あってくれますか。」本人とあいました。おとどい本人は私にこういうことを言うんです。「先生，つまんないよ。」「なんでつまらないの」と聞いたら，「体育できないんだもん。」「そうか，体育でつまんないのか。」「みんな体操できるのにぼくできないんだ。つまんない。」全く元気なくボサーッとしています。じゃあ私の部屋へおいでと言いましたら，松葉づえついてきました。ところがですね，私はっと気がついたんですね。というのは私の観察等と担任の話をきいたところによると，右足はやや良いんですが，左足が今度は悪くなりましてね。階段歩行が問題となってきたわけです。本人は学習は中の下なんですが，集団参加の問題がいろいろと出てきているんです。例えば，避難訓練，これはいざという時どうなるだろうか，担任は女性なんです。かなり年輩の方なんです。その担任は情緒障害児をもう一人かかえているんです。

さて，今度は学校管理の問題なんですね。学校長は，私のところへきていませんが，担任が非常に悩みを私のところにいってくるんです。どうしたらいいんでしょう。筋ジス病の子どもはどうしたらいいでしょう。まあ定期的に月一回ドクターの方に行っているんですが，ところが左に転じているんです。松葉づえをひょっとみたらかわっているんです。というのは，子どもは成長していくので松葉づえをかえなくてはならないんです。「前のはどうしたの」ときくと，「家においてある」「そう」その子と私，20分ほどあいましていろんな話をききました。２年生ですのでかなりしっかりしています。しょっちゅうあおうと思えばいつでもあえるものですからね。そうして互いの話をきいて，そういうことですからだんだん心がしずんできて。まだ１年生の頃はものすごく明るかった。しかしその子は元気をとり戻すと松葉づえを非常にうまくつかって校庭のすみからすみまでポンポンとんであるくことができる子なんです。ところが，２年生になって最近元気がない。どうしてなんだろう。私は非常に心配になりまして，また担任もいっしょうけんめい学習指導してあげていますが，もう一人情緒障害のお子さんをもっているためにきわめて子どもに対しては模範的な態度で接しているんですが。こうみると結局両足にもうきているんですね。両足の場合になりますと松葉づえがむりということなんですね。両足けいれんをしたらどうなるんだろう。私も今ちょっとこんな話をしながらその子の顔を思いうかべているんですが。これではたして普通学級の中で良いのかどうか，そしてその子どもは毎日これからどう学習をのぞんでいったらよいか。国語や算数，社会や理科は非常によくやっているんです。だけれどもおちこんでいるのは体育。他の子どもたちが，１年生とちがって２年生になると非常に活発になるんです。遊び時間も，一人ぼっちになるんですね。皆がいっしょうけんめい１年生の時はかばってくれたんですが，今度は２年生になるとてんでばらばらの遊びになるんです。担任の先生がいっしょうけんめい遊べる方の相手をしようと思ってもうまくいきません。

私はこれ学校関係にかかわる問題だと思うんだけれども，日夜担任がいっしょうけんめい努力してその子に接しています。そして努力しているけれども，子どもの方はだんだん暗くなっていく。今そこが非常に私自身は悩んでどうしたらいいか担任と一緒に私も考えてしまう。

実は私今日はこっちの方に来てしまったものですか

ら，役所の方に行きました(仕事がありましたので)。今日はどうなっているのかと今日帰りましたら，担任の家に電話して（しないうちにかかってくると思いますが）たづねようと思っています。

まあそんなようなことで，もう一人の児童のことを申し上げます。これもやはり私が就学相談をやりました。この子は実は CP なんですが，栓塞性の足の障害ですからビッコなんですね。実は矯正靴の問題がありまして，その矯正靴をどうするかということで就学相談に来ました。これは１年生に入れなければならない。非常にたおれやすい，つまり転倒しやすいんですね。階段歩行がムリなんですね。その子がとにかく普通学級に入れてほしいという希望があるので，その子をいろいろと観察して当面普通学級に入れてみよう。１年間観察という条件つきで，そうしましたらその子非常に元気で明るい子になりましてね。体育は徒手体操をまねしてやります。矯正靴をはいて，これはいいんですね。階段歩行もやっとてすりにつかまってできるし，１年生で１階ですからそうそう階段はありませんが，２～３段ある階段は可能なわけです。この子は非常に明るくそして他の子と一緒に遊びます。この子には，ごく相談的態度で接していますから明るく，学習の方も中の下ですが，ついている。まあ明るさもある。非常にいいんじゃないか，それにまわりの子どもたちもまたその子を中心に，遊びの時は，「りえちゃん遊ぼうね」といって一緒におこなっています。低学年ですから，１年生でまあ非常に今の状態でいい結果になっているんですが，その場合にちょっと問題が出てきているんです。その子はなわとびがしたいんですけどできない。「先生，なわとびしたいんだ。」っていうんですね。しかし，矯正靴は重いんです。ビッコで片方の足と５cm ちがうんですから右と左で，さあ大変なんですね。やろうと思っても片方の靴は重いんですね。矯正靴ですから。なわとびができないって泣いているんですね。これができる方法がないものだろうか。みんなでクラスの子達と共にボール遊びをしようじゃないかと考えました。肢体不自由児の足の悪い子どもをみつけてボールをけっても，又，もどってくるというバランスボールを考案したんですけど，そんなもので当面子どもの情緒安定をはかろうではないかと担任と話しております。

観察してみますと，学習の方は非常についていけます。問題は肢体不自由といわれた子どもで普通学級の中で，矯正靴とかで可能な子どもはよろしいんですが，ところが松葉づえで，さっきの子のように病気が進行してしまう。そういう子どもの問題の処置が非常に大変ではなかろうかと思います。

実は治る時は非常によく治るんです。ある１つの養護学校から就学相談にきたケースがあるんです。５年と６年生です。６年生は中学校の普通学級に行きたいという相談。養護学級の方で院内学級といって，ベッドサイド・スクールでその子は両足が同時に切れましたから，実はダルマさんと同じなんです。歩行器も無理ということで，はじめ寝たきりで敬遠していたんですけど，歩行器から松葉づえにかわりました。その子は５年生ですけど，１年間観察しようということで，１年間傾向をみた結果ドクターの方では，これは非常に経過は良好であるとひとつの病気の方はかたまるんだろうという判断で，１年間の普通学級の中学へ入れました。

この子は過激な運動はできませんが，運動はある程度全部ついていけます。体育祭，運動会では一応参加（又は参観）しているといいます。ただ他の審判などの役割をして集団参加が可能です。この子は非常にうまくいっております。今は，そういう風に肢体不自由児をとらえても普通学級で可能な場合と不可能な場合があります。それはなぜかというと今日，日本の学校の様式が肢体不自由児用に作られていませんね。まあせいぜいトイレぐらいは直してありますが，それ以外のことはあまりなされていないということで，学校管理の問題の中にそういった環境の問題が１つ含まれてくると思います。

そういったようで，治療可能な子どもで私がとりあつかったケースでは非常に成功している。ただ今問題になっているのは，その２年生の子どものことが実はあるんですけど，その病気が早く両足じゃなくて片方でもよくなってくれればと，暗さの気持ちが少しでも治ってくれればと思っております。

私は実際担任していませんから，そういう就学相談というような教育相談をやった後に，普通学級の先生と提携してやっております。そういうわけで普通学級の先生とたえず情報交換をします。私は水曜日を巡回日にしていますから，朝から学校へ行って担任と会い子どもと会っています。そういった巡回制度をとっていますから，子どもたちの状態をつかめています。

肢体不自由の子どもには教育場面というのでしょうか，中で，学級経営のしくみにきわめて問題があるのではないか，非常に先生がいっしょうけんめいにやって教育相談的な態度で接しています。ですが，そういった問題の子どもたちは，これからも出てくると思います。特に肢体不自由といってもいろんな症状があるんですね。ですから筋ジスの場合は初め歩行が可能であってもだんだん不可能になっていきます。しまいには車いす，車いすも無理になっていきます。そういうお子さんの問題が

非常に困るんです。

私は筋ジスの子どもを２年間扱いました。初めは非常に良かったんです。松葉づえをついてきていたのですが，そのうち車いすにかわりました。学校までつれてくるんですが，ということは，本人が車いすからおりたがらない。恐がっちゃうんですね。車いすごと教室に入れて授業します。ところが，体がだんだん変形してきます。筋ジスの場合は胸部変形していきますと，呼吸困難になります。授業についていかれなくなります。ゼイゼイやります。そうすると学習にならなくなってしまいますね。筋ジスの取扱いは，私は非常に難しいと考えています。

肢体不自由の子どもを普通学級の中に入れておくということは非常にいいんですけれども，特に筋ジスの子どもなどは病気の進行することによって頭がだんだん冴えてくる子が多いんですよ。私非常にびっくりしたんですが，小学校４年生の子どもを面倒みたんです。そうしましたら，その子は実は英語も勉強したいと言いだしました。そしてNHKの英会話のテキストも買いまして，あれを全部やったんです。そうしたら５年生で大学２年生程度の英会話ができるようになりました。私はびっくりしました。私が英語を教えると，「先生ちがってるよ，そのスペル。」とこうなるんです。弱いな私も，中学の英語の教師をやったことあるんですけど。過去にライセンスを持ったことのある私もかぶとをぬぎました。

実は筋ジスの子どもは，首から上が冴えてくるんです。病気が進行すると体がこんなになってるんですけど，非常に私はそういうことでこの子どもたちはどうしたら良いのか，この子の幸せはどうしたらいいのか，ということ。実はその子はとうとう死んでしまいました。風邪をひいてタンがつまって，呼吸困難で死んでしまいました。筋ジスのお子さんは長生きはしませんけれど，せいぜい生きて25～26歳なんです。その子は残念ながら18歳で死んでしまいました。残念だと思ってるんですけど，死んでいく時，私にあいたいと言ったそうですが，たまたま私は盛岡に出張しておりましたものですから，会えませんでした。後で日記を見た時，私は泣きました。

しかし，そういう子どもたちがえらいハンディキャップを背負っている子どもであっても，学習についていかれる部分，これは大事に育てていかなければならないんじゃないか。ところが今の問題は就学ということにあるわけですね。そういう対策を，今後考えていかなければならないんじゃないか。そうすると，そんなことは養護学校に入れれば良いじゃないか，と一言で言うのですが。養護学校に入れる前に，もう１つ前に，ワンテンポ何かできることはないかということを考える必要があります。私が就学相談をあつかっている時，非常に苦しんだことです。それから，実は私２年間，普通学級における心身障害児の理解というシンポジウム議会の委員長をつとめていまして，まとめたものがあります。

また私は昔，20人ほど自閉症の子供をあつめて普通学級の中で指導ができないかと思ってやったことがあるんですが，そういったことで今でも非常に関係がありまして，私のところの相談には登校拒否児から，自閉症的傾向の子ども，病弱児まできているんです。ここに１つケースがあるので申し上げたいと思います。これは普通学級の先生がつれてきたんですけど，実はちょっとみると自閉症の子どもかどうかわからない顔をしていました。この子どもを私は担任しなくてはならない。そうしてどうしたら良いか。まず，このＳ君が入学から卒業までを考えてみたいと思うと担任はいいます。担任はいっしょうけんめいやりたいと思い，当時，職員会議で全職員にその意義を申し上げました。そうしますと，約半数は教育観にもえて一生けん命協力してくれましたが，半数は冷静であったということで冷たい目でみていたそうです。私はこれでいいのかどうか悩んでしまったわけです。

そしてその子は，梅が丘病院に行くようになりだんだん病気が重くなって，ことばがあったのになくなってしまいました。かわいそうだと思って，梅が丘病院に行きました。けれど病院の先生はそれであたりまえだ，と言ってくれました。私は子どもについてどうしたらいいのか，まず最初に思ったのは遠足です。遠足ではたしてこの子は参加できるのであるか心配しました。私の言うことを聞いてくれる人の中に入っているけれど，学習が全然成り立っていきません。だけど，一生けん命この子のことを思って努力しておりました。この頃のことを振り返ってどうなのか。普通学級の中においてよかったのかという実感。普通児の進路についていけないということ。そういうことで特殊とみなすことがいいのか悪いのかということを思います。

しかし，自閉症ということばに対する疑問があります。良いクラスを作るということが私の最大の努力です。学校でできるだけ先生方に会って話していきたいと思います。この先生一生けん命になって，そうやって対処しているんです。実は私この子も就学相談で扱った子なんです。さて，はたして普通学級に入れていいのか非常に悩んだんです。

そして就学指導委員会の中ではかりました。そした

ら，普通学級に入れるべきというのが半数以下なんです。みんな情緒障害学級へ通わせたらいいのではないかというんです。今，その子は情緒障害学級へ週に２回通級しています。そうしているんですが，残念ながら言語がなくなってしまったんです。だから情緒障害学級でどれだけやっていけるのか，普通学級にきたらどうなのか，一つ見守っていきたいと思います。だから，こういう型の子どもの心をひらく方法で，普通学級の中で何かできないかと思っていくということを大事にしていきたいと思っています。

普通学級の中で自閉的傾向のある，あるいは自閉症の子どもはどうなるのか，これは私自身普通学級の担任ではございませんので何も言えないのですが，できるだけその先生の力になっていきたい。そしてその先生がノイローゼにならないようにと思っているんです。

実際，学校の現場の先生のノイローゼが非常に多いんです。ノイローゼにならないように私は補助していきたいなと思っています。これは本当に笑いごとではなく，事実そうなんです。非常に今，ノイローゼの先生が現場に多いんです。なぜ多いのかということは自分が学級運営の学級王国になればいいんですが，学級王国になれない先生もいらっしゃる。そのためジレンマに陥いってしまう。ですから私は普通学級の中に心身障害児といわれるようなお子さんを入れても，ハンディキャップのあるお子さんを入れても，学級単位の問題ではないかと思っております。

ところが，言語障害とか難聴のお子さんはこれ又別です。本当に情緒障害，肢体不自由を受持った担任は大変だと，思っています。ただ登校拒否の場合は，同じ情緒障害であっても少し違います。もっていきかたがいろいろあるんです。実は私，登校拒否のお子さんの相談にのりました。その登校拒否のお子さんはよくきいてみますと，担任との不一致が原因だったんです。

その子は非行をおこさないから良かったんですけど，こういう話が出てきたんです。私に向かって，担任の先生のことをこういうんです。「K先公はな，おれをバカにすっから，おれ行きたくない。」ぼくはね，この子は非行に走ると思いました。そうしたらそうじゃないんですね。非常に気の小さい子で，「どうしてなんだい。」っていうと，「ちっともおれのことを気にしてくれない。」その子はですね，一生けん命先生に訴えたかったのです。しかし「先生はちょっとも相手にしてくれない。ソッポを向いている。だから学校へ行きたくないんだ。」母親にはそうじゃなくて朝頭が痛いとか，おなかが痛いとかいうんです。だから学校へ行かないっていうんです。だけど私と接していると，あの先公が変わったら学校へ行くってこう言いだしました。私，非常に困りました。これはちょうど一年前の今ごろです。しょうがないから２か月間面接をずっと続けました。そうしましたら学校に行きだしました。

その子の登校拒否の状態を調べてみますと，非常に神経質で，そして物事を気にする。その先生のすることがいちいち全部気になっていたということです。初め先公なんて変なことばを使っていたもんですから，私はこれは非行に走る恐しい子だなと思ってました。本当はこちらが先入観をもっちゃいけないんですけれど，そう思わざるを得ませんでした。真実は気の小さい神経質な普通の子でした。

お母さんとその子は不一致でした。お母さんは共かせぎで子どもにあてがいぶちをしているんです。「今日これで食べてね」とポンとお金をおいていくだけです。家庭の中でも接触がなかった子どもなんです。この子は何も情緒障害学級に行かせることはないと思います。私は子どもの状態を十分把握してそののちに学級の先生方が相談的態度で接することがあれば，情緒障害といわれるような子どもであってもうまく適応していくのではないかと思います。それをあまり大げさにしたらかえってまたいけないという気がしています。

というところで私の時間が終りました。ちょうどジャストというところです。どうもありがとうございました。

司会：司会の不手際で進行が予定よりおくれています。そこでスピーカーの方々の補足も含め，フロアーの先生方を交えて一緒に討論したいと思います。

鈴木(早大)：見えない人が普通学級でどのようにしているかについて１例をお話します。今年早大の法科を卒業した者の例ですが，この人を卒業させるに当って30名近い点字グループがそれを支えてきました。

某氏(所属・氏名不明)：林さんのご発表は，他の御三方と異なる立場からのものであり，普通学級を担任している先生が，ハンディキャップをもつ子どもたちをどう扱っているかという問題を出されました。他の御三方の発表は，専門家の立場からハンディキャップをもった子どもたちにどう対処するかについて見解を述べておられます。普通学級40名の中にハンディキャップ児が入れば，その１人の教育のために他の多くの普通児が犠牲になってしまう。全部の児童が個別指導を受けるのならよいが，１人のハンディキャップ児だけを特別に扱うのでは不公平であると思います。

林(茨木市立中津小)：子どもたちには自我があり，教室の中でも自分を主張するので困ったことだと思っています。一斉授業の中で，個々の問題がわかれば一対一ではできないが，親と相談したりということは時間があれば努力できるという段階です。気付いたときは親に話し，何かあれば親から連絡してもらうという，三位一体を願ってやっています。そのとき，教師への信頼が子どもと親になければ成功しないことがわかりました。ハンディのある子どもが，普通の子どもと同じように100点とることを実際には思っていません。その子のもっている能力が充分発揮できたら，その子は満足するのではないでしょうか。今の授業はそういうことでやっています。

大脇(国立身障者リハビリ・センター)：一斉授業，学校の集団生活では，聴力そのものや話す能力よりも，言語受容能力の程度が深く関係します。

司会：問題は一括して「普通学級で教育するのがよいか」とか，「そうでない方がよいか」というよりは，もう少し生徒１人々々によって違うということではないのでしょうか。

森永(伊豆逓信病院小児リハビリ科)：小児リハビリテーションで最後につまづくのが教育の問題です。１つの障害の場合でも，重複障害をもつ場合でも，小人数の教育を必要とします。

高橋(府中第２小)：東京都には就学相談の制度があり，障害児１人々々のケースについて，その適切処置は何かを検討しています。場合によっては普通学級へ入れ，また場合によっては特殊学級へ入れて，その様子を多くの角度からチェックしながら処置するようにしています。

鈴木(早大)：どうしても世界の趨勢はインテグレーションの途にはいっています。今がどうというのではなく，歴史のうえに立って考えていく必要があると思います。

森永：障害児を普通学級に入れながら，併せて治療教育をするということが大問題で，この実施を提案します。

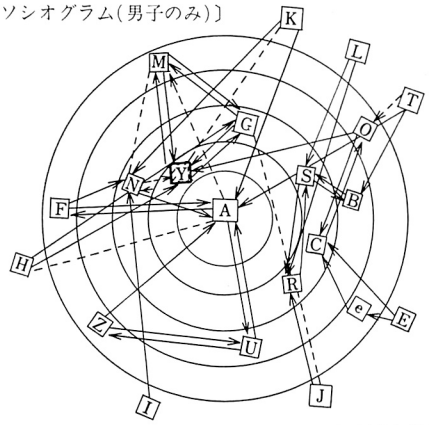
林：大阪府の中でも進歩的といわれている或る市の方式は，養護学級の児童も普通学級に入れ，それに「養担」という名称の教師が１名付いて，その児童の面倒をみるというものです。１年生は普通学級の中で，初歩段階から全部こなしていこうという方針がとられています。

司会：教育は常に行政との絡み合いの中でおこなわれます。そして，行政の方に或る決断をさせるには，教育現場からの情報と研究者による研究結果をふまえた意見が反映される必要があると思われます。そういう意味で４名の先生方に，それぞれのお立場からの現状のお話と，そこから導き出された結論に近い意見をお聞きすることができ，またフロアーの方からも貴重な幾つかの御意見が提出されたことは意義があったと考えます。

＊　　＊　　＊　　＊

―資　料　Ⅰ　(林)―

〔ソシオグラム(男子のみ)〕



相互選択 ⇄　　選択 →　　中心ほど社会性がある(人気がある)。
相互排斥 ⇢⇠　　排斥 ←-

〔Y君：日記 1-1〕

5月6日　てんき
　土曜日

きょうの夜ぼくはゆめを見ました。そのゆめはぼくが、はっとりろくちにいったゆめです、ぼくがはっとりろくちではしりまわっているところです。ぼくは足がなおったからです。ぼくがはしっているとあきらちゃんあきらちゃんと、くりかえしているのです。ぼくはぱっと目をさませました。それはお母さんがぼくをよんでいるこえでした。

〔Y君：日記 1-2〕

7月22日　てんき
　日曜日

こんばんのごはんは、やきにく。ぼくは、それがまちどうしくてたまりません。野球のおおえんの時もやきにくのことで頭がいっぱいです。でも少しざんねんなことがある。ぼくは、足がまだなおらないから野球にはでられない。もしも、野球にでられたら帰ってきておなかがぺこぺこになりおふろには入りやきにくお食べると、おいしいだろうなあと、心の中で思いました。

〔K君：日記 2-1〕

きょう、おとうさんのやきゅうのしやいをみにいきました。
さいしょはよかったけどあとからはだんだんちょうしがえんになって9たい2ぐらいでまけた。

〔K君：日記 2-2〕

きのうほうかご算数のプリントを100点にしなければならないからほうかごのこってかこうとしてもわからないから中尾くんにきこうとおもったけどだれかとあそんでてそのあいだ中尾くんはかえって東田くんと上野さんとかきうちさんがのこったそれでかこうとするとわからないからなにもかかなかったら東田君がいきなりカバンをけったりつくえをけったりけしごむがおちていたから東田くんがかさでけしごむをとばしたりかきうちさんが自分がかえれないからぼくばかりにやつあたりばつかりぼくにした。

〔K君：日記 2-3〕

　ね　こ
ぼくのねこ、ぼくのねこのなまえわミイコとゆうなまえです、ぼくががっこうにいってかえってみると、ミイコわさみしそうにニャーオニャーオといっていました。
ミイコわ、あたまをなぜるとぐるぐるおなかからきこえてきます。ミイコはそとにでると一にちぐらいたったらかえってきます。しかしミイコがそとにでたら、おかあさんわみいこがそとにでないようにミイコをたたきます。ぼくわミイコがかわいそうだなーとおもった。
でるミイコもわるいしミイコがわるいとおもった。
ミイコのすきなたべものは、おこのみやき、きゅうり、つけもの、さかな、ぼらずし、ミイコは人げんのたべものをたべるからふしぎだなーとおもった。
ぼくたちが、ミイコをさはるからやせてばかり。

〔Y君：日記 1-3〕

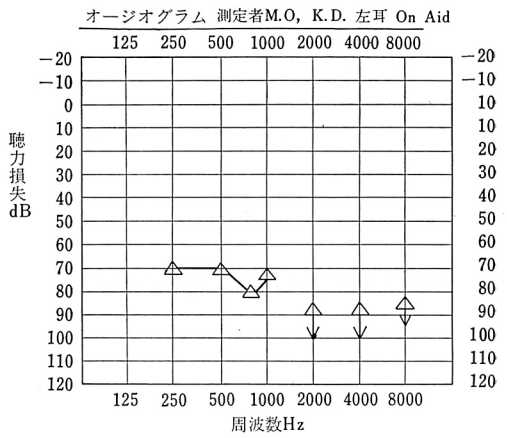
7月26日　てんき
　木曜日

きうはじめてせいざをしました。すると足がびりびりしてきました。だからすぐシップをしました一日たって見てみると少し足がはれていました。少しあるいてみると少し足がいたかった。あと一週間で海へ行くのにまたあうかとしんぱいです。外へあそびに行きたいけど外へ行くと足がひどくなるばかり、だからぼくはまい日はをくいしばっています。

—資　料　II（大脇）—

1．K. D. ♂，12：8　両側感音性難聴

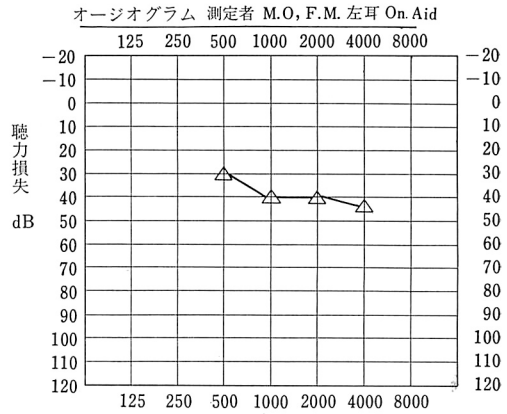
原因：母体の風疹による先天性高度難聴（2級）
出産歴：妊娠3か月に風疹，陣痛微弱で出産1600ｇ
新生児期：哺乳力微弱で人工栄養
病歴：麻疹2：6，中耳炎5：0
補聴器：2歳頃より10年間常用，8歳まで両耳に使用し，現在7台目，RHA-46型
集団生活：乳児期に検診，相談を受け，ろう学校幼稚部普通小に在席中（1年就学延期）6年生
心理検査結果：WISC VIQ 60，PIQ 92，全検査 IQ 72，Kohs 立方体検査 IQ 100



左右耳96dB（On Aid 79dB）

2．F. M. ♀，8：6　両側感音性難聴（4級）

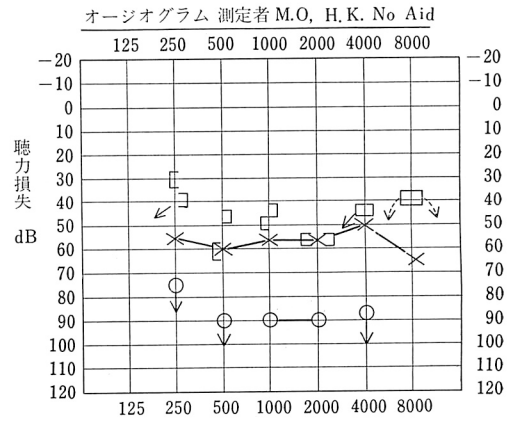
原因：不明，先天性，父方叔父はろう
出産歴：妊娠8か月で出血，2回注射
病歴：麻疹3歳，耳下腺炎4歳
補聴器：S49．7から現在まで5年間
集団生活：3年保育，普通小に在席中3年生，地元の言語治療教室へ通う
心理検査結果：グッドナフ人物画検査 IQ 117



右耳91dB
左耳69dB（On Aid 37.5dB）

3．H. K. ♂，12：11　両側感音性難聴（6級）

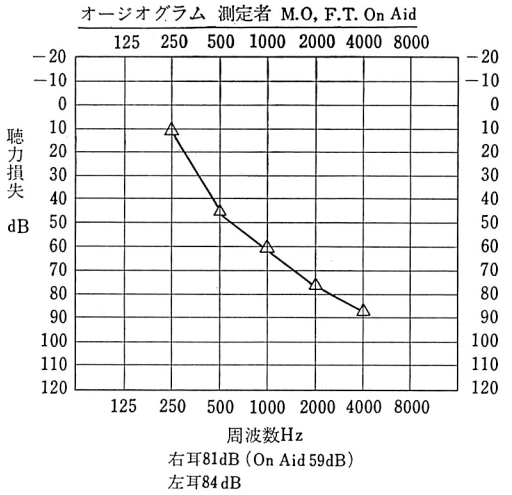
原因：母体の妊娠中の風疹
出産歴：上記の他異常なし
家族歴：父親が SM による片側ろう
病歴：白内障の手術（左眼）
補聴器：S46．7から現在まで8年間
集団生活：幼稚園2年，普通小学校，中学校1年生，難聴学級へ通う
心理検査：Kohs 立方体検査 IQ 159
WISC P. IQ 105



右耳91dB　　左耳64dB

4. F. T. ♀, 10 : 11　両側感音性難聴（3級）

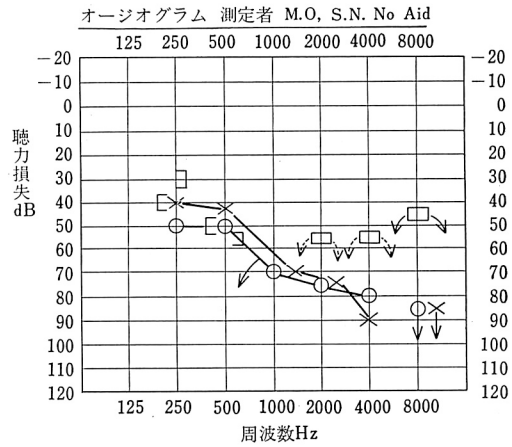
原因：不明
出産歴：異常なし
病歴：麻疹1 ： 3
補聴歴：S47. 12から現在まで7年間
集団生活：幼稚園2年保育，私立小学校5年生
心理検査：WISC PIQ 151



右耳81dB（On Aid 59dB）
左耳84dB

5. S. N. ♀, 11 : 5　両側感音性難聴（6級）

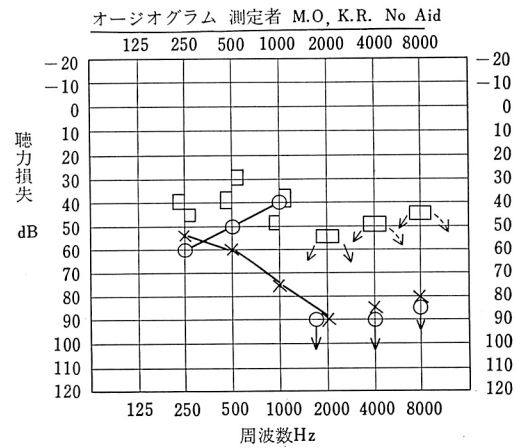
原因：不明
出産歴：異常なし
病歴：麻疹2 ：10
補聴歴：S46. 7から現在まで8年間
集団生活：幼稚園2年保育，小学校6年生
心理検査：WISC PIQ 116, VIQ 75



右耳　70dB　左耳　60dB

6. K. R. ♀, 9 : 2　両側感音性難聴（6級）

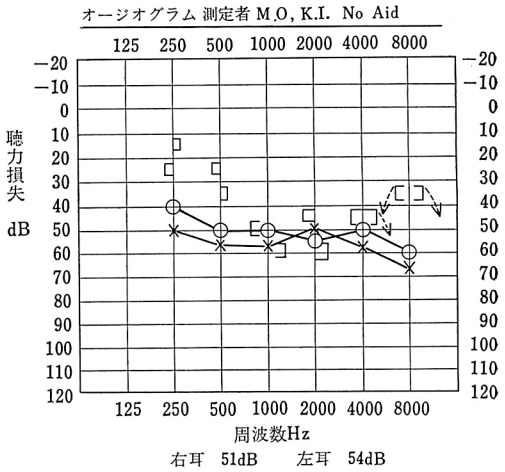
原因：不明
出産歴：新生児黄疸
病歴：麻疹2 ： 5，中耳炎3 ：10
補聴歴：S48. 9から現在まで5年間，S50から耳掛け型から箱型へ変更
集団生活：幼稚園2年保育，小学校4年生
心理検査：ゲゼル発達検査結果正常，言語発達は遅滞



右耳　56dB　左耳　75dB

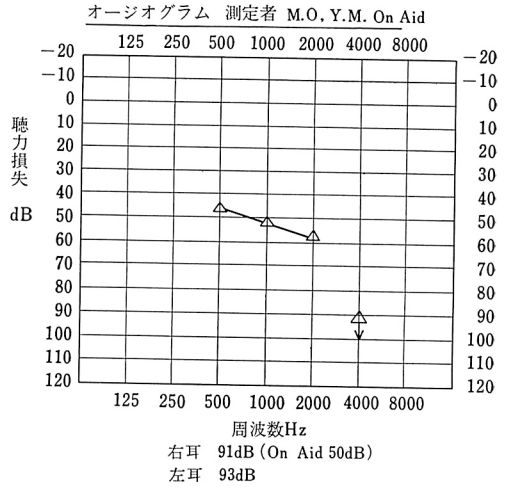
7. K. I. ♂, 10 : 10 両側感音性難聴

原因：家族性（兄，祖父の弟も難聴）
出産歴：誘発分娩
病歴：水痘，中耳炎３：３
補聴歴：S47. 5より７年５か月
集団生活：幼稚園２年保育，小学校５年生
心理検査：コース立方体検査 IQ 110
グッドナフ人物画検査 IQ 118



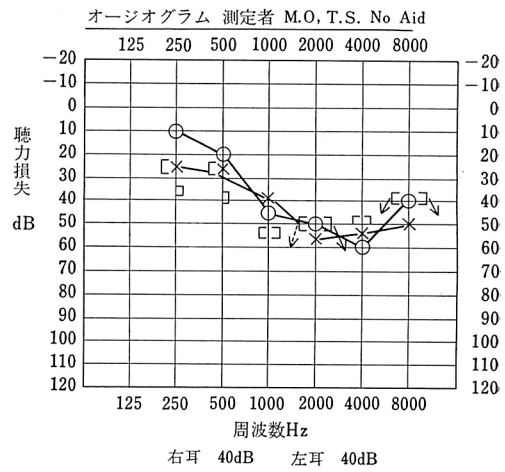
8. Y. M. ♀, 14 : 5 両側感音難聴（２級）

原因：不明
出産歴：妊娠４か月時軽度貧血，感冒
病歴：水痘５か月
補聴歴：S43. 11から現在まで12年間
集団生活：乳児院・保育園，小学校を終え現在中学校１年生
心理検査：コース立方体検査 IQ 139
WISC PIQ 117



9. T. S. ♂, 14 : 2 両側感音性難聴

原因：軽度 CP
出産歴：吸引分娩，重症黄疸，交換輸血
病歴：耳下腺炎２：９
補聴歴：S46. 7から現在まで８年間，常用はしていない
集団生活：幼稚園１年保育，小学校，中学校１年生
心理検査：鈴木ビネー IQ 100，WISC PIQ 93，VIQ 78，両手協応反応の遅滞



作文の項目別結果

項目／事例	年齢・性	学科目	学校行事	友人数	友人との間	教師数	教師との間	教師の態度	友人の態度	本児の得意	難聴受容	補助学習	将来の希望
1. K.D.	12:8 ♂			親友 野球チーム	遊び時間 ベースボール 会議								この学校がよい
2. F.M.	8:6 ♀	体育・水泳 かけっこ 鉄棒×÷算	運動会	組がえ	運動会 2等 マラソン 3等		3年の時教師が変った		いじわるされる やさしい人もいる		このごろ話しがわかる様になった	げんごちりょう教室へ 1週2回	がんばるつもり
3. H.K.	12:11 ♂	45分授業 速い	体育祭 青組優勝		ろう下で話すきまりを守る	58名中 12名	各教科ごとに教師がかわる 教師名		笑顔の人と会うと嬉しい		授業中耳を働かせる		
4. F.T.	10:11 ♀		キャンプ 高原小学校運動会	親友ともう一人45人クラス	交換日記も徒競争1等		担任教師の得意と名前	おこるとこわい	教えてくれる（親友）		友人が話しを教えてくれる		リレーの選手希望がんばる
5. S.N.	11:5 ♀		運動会 バトンガール					耳の日にほめてくれた	低学年で悪口いわれた	バトンガール	生れつき耳が悪く訓練した		中学になると同じ目でみられるがんばる
6. K.R.	9:2 ♀	ローマ字 音楽 習字	運動会の練習	850人の学校 35人クラス	給食を食べてくれる				男子いじわる女子なかよし			難聴学校へ行く，音楽はことばの先生	がんばります
7. K.I.	10:10 ♂	図工，体育，算数		ボール遊び全員	腕ずもうで女の子にまけくやしい		担任の教師めがけねをかけた男の先生	わかりやすく教えてくれるうまいぞとほめた		集会委員会 書記			
8. Y.M.	14:5 ♀	各科目テスト成績 英語よい	水泳大会 運動会		交換日記をしたい 障害物1等	10名	各教科の教師名			油絵 ソフトボール	耳の人2名みんなで3名	教師名2名，友人2名	
9. T.S.	14:2 ♂		体育祭 だいだい色2位，428点		百メートルレース 7人中4								
パーセンテージ	11:8 ♂4 ♀5	56	78	56	89	22	56	33	56	33	56	33	56

〔私の学校生活〕作文例

1. K. D.: 南風原小学校二年生の時，ぼくは友達と一つしように野球をしに行きました。ぼくはストライクを知らなかったからアウトはわかるけど。ぼくの親友が「おまえ，どうしてストライクを知らないのかい」。と親友がいった。みんなは「アハハハ」とわらいぼくははずかしくなりました。

9月になった友時ぼくは友達といっしょに運動場に出て遊んだ。ぼくの親友が「もういい下がれ」。と言った。親友がベースボールの会議があって話し合いをした。初めにベースはどんなことをしたらよいかみんなで決めた。みんなは「ガヤガヤ」と言って親友が「それはいい考えだ。これはひみつのことだ」。と言った。ぼくが「何ひみつ，ひみつならぼくも聞かせてくれ」。と言った。親友が「まだまだ決めていない」「そうならば少し聞かせてくれる」「これはバッターボックスに立ってピッチャーが投げると頭に当ったらどうなるか。そうしたらダメになるよだからバッターボックスのうしろに行けばいい」。ぼくが「そうかこれはいい考えだ」。みんなも「これはいい考えだよ。それならキミの親友をキャプテンにしょう」。ぼくが「それならいい。みんな親友の言うとおりにしょうか」。みんなが「そうならばこれはキャプテンのとおりにしょう」。みんなが「オース」と言った。ぼくの学校はやっぱりいいやと考えてみた。親友は頭のよい親友だ。

2. F. M.: 私の学校「沼田市立北小学校」は今年新しく出来ました。いままで通っていた「東小学校」があまりいっぱいになったので二つにわかれたのです。私は今，東京へかよっていた時からいっていた「げんごちりょう教室」にいって勉強しています。沼田には一つしかないのでね沼田の人は，みんなここへかよってきます。東小のすぐそばなので，一，二年の時は一人で通っていましたが北小になってからはお母さんといっしょに一週間に2回かよっています。一年生の時にはみんなのいうことがよくわからなくて勉強は，よけいわかりませんでした。けれど，このごろようやくみんなのいうことやすることがわかるようになってきました。

三年生になったばかりのときは，組がえがあって，ともだちも先生も新しくかわったのです。でもだんだんなれてきて夏休みもおわり二十三日にうんどう会でした。勉強よりたいいくが私はとくいです。すいえい，かけっこ，てっぽう，ボールあそびなんでもすきです。うんどう会のときもせんしゅで，とび，がんばって二等になりました。マラソンでも一，二年生の時クラスで三ばんになりました。今年もうんとがんばろうとはりきっています。勉強はわからないところがおおくてすこしずつ家でもやっています。かけ算。わり算はできるようになりました。みみのきこえがわるくておともだちにいじわるされることすあります。‥‥がやさしくしてくれる人もいます。これからもすこしずつがんばっていきたいと思います。

3. H. K.: 今年は中学校一年生！ 中学校生活は慣れて二学期にはげんでいます。授業は45分もある。休み時間になると次の学習準備をしてから遊ぶんですが‥‥ぼくのクラスはあばれる人が多くて廊下で友達と話します。

柏三中はいろいろなきまりを守らなければいけないのです。“どうしてきまりを守らないといけないのだろう”。“学校生活”っていろいろあるものです。いつもなら友達としゃべるのが証拠だが‥‥授業中は真剣に耳を働らかせるのがこつ。時々笑顔のいい人と出会うとうれしい！

次に九月十五日実施した体育祭についての生活!! 晴天の日八時四十分から入場し“頭右なんてあるのです”。テーマがあるんです。“集団の美”いろいろな目標がありなごやかにやりました。青組・赤組・白組の三色対抗です。それはクラス別できまるんです。ぼくは青組です。成績発表の時ワーワーさわいでいたら，優勝青組，応えん賞青と発表された。とてもよかった。“なぜか”と言うと小学校とずいぶん変っていた。なんかおかしいのは小学校は運動会といっていましたが中学校は体育祭と言うんです。とてもおもしろかった。

小学校と中学核の違いは各教科ごとに変わるし授業も速くなるしいろいろちがうことがわかる。

ぼくの先生を紹介します。まずクラス担任の仲嶺先生です。髪は長いんですよ。これから各教科の担任を紹介します。国語＜仲嶺先生＞です。難しい漢字を教えてくれます。数学＜橋本先生＞です。とても若くていい先生です。理科＜阿嘉先生＞です。この先生の名前変わった名前でしょう。この先生は沖縄県出身だそうです。社会＜中山先生＞女の先生いつも笑顔のいい先生です。英語＜海老原先生＞です。この先生は友達がアメリカにいるんだそうです。技術・家庭＜三好先生＞です。授業でない時うるさくおこる先生です。美術＜菅野先生＞この先生は福島県出身でとてもいい先生です。書写＜崎浜先生＞ちょっとかわっているんですよ。やさしすぎるようです。保健体育＜中山先生＞男の先生ハンサムな先生です。音楽＜榊原先生＞音楽的で声の高い先生です。これが各教科の先生です。三中の先生はいろんな人がいるの

で迷ってしまいます。五十八名もいるんですよ。

4. F. T.: 私の学校の名前は東京文化小学校です。家からは西武新宿線に乗ってバスと地下鉄の東高円寺で降りて歩いて10分位の所にあって45分位かかります。毎朝6時57分の電車に乗って行きます。今度新校舎になって九月に入って勉強したり遊んだりしています。クラスは45人です。体育の時間には古い学校の校庭でやります。先生の名前は中島先生です。一年生から受持ちが同じです。スポーツマンでサッカーとソフトボールが好きです。それとビールの大好きな先生です。おこると恐しいです。私の一番仲良しの友達は飯塚香織ちゃんです。同じグループで先生の話しが分からなかったら，カオ（香織）が教えてくれます。もう一人は斉藤純ちゃんです。じゅんべー（純）は私とこうかん日記をやっています。夏休みは五日市キャンプと蓼科高原学校と浅間高原小学校がありました。9月23日に運動会があって，徒競走で一等になりました。今度はリレーの選手になるようがんばります。勉強もがんばります。

5. S. N.: 私は生れつき耳が悪くて，国立聴力言語障害センターに通っていました。そこで言葉使いやものの名前などいろいろ教えてもらったおかけで私はふつうの人におくれをとらずにすみ，今小学校の最高学年6年としてがんばっています。

まだ私が低学年のころ，クラスメートの人たちは，私が生まれつき耳が遠いことを知らずずいぶん耳のことで悪口をいってしまいました。が今はもうそのようなことはめったにありません。五年の終りごろの三月三日の耳の日に，先生が耳についての話しをしていた時「耳が悪くても普通の人としてがんばっているのです。みんなもがんばらないとおくれてしまいますよ」。と，私をほめてくれたことを今でもおぼえています。私は学校でバトンクラブにはいっています。私はバトンは4年生の時からやっていて今はもうすっかりなれました。十月十四日の運動会に行われるパレードで，バトンガールをやるので，三年間のクラブ活動のしめくくりとしてせいいっぱいやろうと思います。クラブにはいったころも低学年と同じように他の人が耳が悪いのをめずらしそうにみていましたがこれも何か月かたつと，普通の人と同じに見られるようになりました。私も来年で中学生になります。その時も他の人が，私の耳の悪いことを知ったら，また低学年のころと同じ目で見られるかも知れませんが，私はそんなことでめげずにこれからも普通の人としてがんばっていきたいと思います。

6. K. R.: 私の学校は栃木市立第二小学校といいます。家からは電車で五十分かかります。いつもお母さんに送っていってもらいます。私の学校はみんなで八百五十人ぐらいいます。私のクラスは四年一組で三十五人です。私は集会係をかしています。勉強は国語・算数はなんちょう学級へいきます。音楽はことばの先生におそわります。とても楽しいです。今はローマ字もやっています。私はローマ字は大すきです。習字もならっています。二級です。

給食の時間はあまりすきじゃないのです。私のすきなものがあまりないのでいつものこします。友達が食べてくれます。男の子はいじわるします。女の子はなかよくしてくれます。今は運動会の練習で毎日帰りがおそいのです。これからもいつしょうけんめいがんばります。

7. K. I.: ぼくは五年生になって一回も休まず毎日学校へ通っています。学校につくとかばんを置いて校庭へ出てクラスの男全員でボールを使って遊びます。六虫や三度ぶつけをして遊びます。勉強で一番すきなのは図工・体育・算数です。体育の時間はいつも先生が「木下前に出ろ」と言うのでいつも見本をやっています。算数はわかるからです。図工は楽しいことがあるからです。この前図工の時間飛び立つ鳥と言う物を書いた時先生が「うまいぞ」。と言ってくれました。ぼくのクラスの先生はメガネをかけた男の先生です。勉強はわかりやすく教えてくれます。たまにゲームをやらせてくれます。勝つと賞状をくれたりしてみんなを喜ろこばせてくれます。うでずもうをした時ふとった女の子とやったら負けてくやしかったです。集会委員会の時は書記をやってがんばっています。

8. Y. M.: 四谷一中学校に行きました。私は一年D組です。私はみんななんでも大すきです。この間夏休みがありました。私のテストでした。英語は92点です。数学は64点，社会は4点，国語は11点，音楽は12点，理科は27点です。それは英語うれしかったです。

私の友達は「‥‥さんと交換日記をしたいんだけどしてくれる？」と言いました。その友達は私のクラスと同じです。とてもうれしかったです。

9月の水泳大会がありました。四谷一中の一年A・B・C・D組です。私はクロール50m 42秒で泳ぎました。優勝は一年D組です。みんなは「わあーい」と言いました。みみのわるい人は三人です。私は○○さんと△△くんと同じ四谷一中に行きました。みみの教室は徳田先生と中谷先生です。みんなの仲間ですね。

10月5日（金）に運動会がありました。一年から三年まで男の人と女の人です。私は障室物競争では一番でした。私は勝った。また私は一年D組全員リレーの女の子です。しかし三番です。おわってから優勝の一番はA組二番はD組です。よかったです。一年AとD組はトロフィーをもらいました。

数学は中条先生です。英話は田中先生です。理科は西

村先生です。国語は小野先生です。地理は峯先生です。歴史は徳田先生です。保健体育は女姫田先生，男市原先生です。それは授業ですね。

私のクラブは油絵です。私の委員会は英語です。また私の部はソフトボール部にあります。腹筋体操60回です。でも今は30回です。最初はクタクタでした。マラソン回り15回です。この間私の体重46.5kg だったのが44.5kg に減ってスマートになってました。でも前夏休みにやらないと体重メキメキ〇〇kg になりました。だまってくれない。ユニホームは私ももらいました。ところが試合に出たけど，ルールがよくわからないから見学っていうことです。試合は負けちゃった。私が出なかったからかな。

9. T. S.: 十月二日は中学初めての体育祭でした。ぼくは一番始めの種目百メートル走第四レースに出場しました。「位置について」。「用意」。「ドン」。ピストルの合図で第1レースが始まりました。ぼくはどきどきしながら順番を待っていました。ついにぼくの番がきました。ぼくは夢中で走りました。ゴールでは七人中四位でした。思ったより早く走れたのでほっとしました。

次は一年男子全員でやるアルピニストという競技です。それは十一人で棒を押えてあとの十一人がリュック帽子をつけて旗をもって走りだし棒をささえているぼくたちの上に飛び乗ってのぼりぼうのようにのぼってそのてっぺんに旗をさしてもとにもどり途中にあるハードルを行きは飛びこえ帰りはくぐって次の走者とかわります。次の走者はその旗をとってもどります。中にはなかなかのぼりぼうにのぼれず落ちた人もいたし，ハードルをくぐるとき，リュックをひっかけてなかなか出られない人もいました。アンカーが旗をたてると棒をささえていた人たちはその棒を倒して旗をとり全員走りこんでゴールインになります。競技はすべて色別対抗で各学年七組まであり，ぼくたちは五組でだいだい色でした。みんなの協力で二位にはいれました。

次は男女対抗の綱引きでした。一回目は女子が勝ち二回目は男子が勝ったので三回目の勝負にでました。みんな女子に負けてははじと思いがんばったので勝つことが出来ました。午後は応援合戦で始まり，ぼくたちはつぎの組立体操に出ました。バランス倒立，飛行機，おうぎ，竹の子，ピラミッド，橋，とび魚など次々とやり，無事におわりました。特にピラミッドがきまったときはほっとしました。次は騎馬戦です。四人一組で奇数番号偶数番号に分かれて戦います。ぼくは馬になりました。ぼくたちは落されることなく勝ちました。各組代表による色別リレーも終わり，閉会式になりました。得点発表になりました。ぼくたちは四百二十八点で優勝です。三年生たちは「やったぞ」。と大声で叫びました。ぼくはとてもうれしかったです。

途中雨がパラパラ降りましたが，無事に終って本当によかったと思いました。